音楽でつづる文学5

源氏物語
―葵上と六条御息所―

「音楽でつづる文学」のシリーズとは

二〇一九年の五月に始まった「音楽でつづる文学」は、音楽と文学が結びついて織りなす豊かな表現をお楽しみいただくシリーズです。最初に取り上げた文学は、十三世紀半ばの鎌倉時代に成立した『平家物語』でした。シリーズ開始の翌年にコロナ禍となってしまい、延期や順番の入れ替えを余儀なくされましたが、計四回の公演を催しています。プログラムに取り上げた作品のジャンルを公演に登場した順序であげると、平家、山田流箏曲、生田流箏曲、義太夫節、地歌、京舞、大和楽、日本舞踊、幸若舞です。音楽のみでなく、舞や踊りもお楽しみいただきました。「音楽でつづる文学」のシリーズでは、さまざまなジャンルの作品をご紹介することも、軸に据えています。

焔　ほのお
上村松園筆（東京国立博物館所蔵）

新たに取り上げる文学は『源氏物語』

さて、シリーズの第五回、今年の十二月十七日の公演からは、『源氏物語』を取り上げます。紫式部（生没年不詳）による『源氏物語』は、十一世紀の初めの成立とされ、平安時代の文学を代表します。「桐壺」から「夢浮橋」までの五十四帖から成る長編の物語には、光源氏を中心に五百人近くの人物が登場し、華やかな貴族社会に展開する人間の心の機微が丹念に描かれています。『源氏物語』には、舞楽や管絃、催馬楽や朗詠など、音楽を扱う場面が多く登場するという特徴もあります。

『源氏物語』は、美術作品、映画、能、歌舞伎など、さまざまな分野に影響を与えました。『源氏物語』の全文を読んだことはなくても、マンガ『あさきゆめみし』（大和和紀作）の全巻は読んだことがある、という方もいらっしゃることでしょう。『源氏物語』の影響から生まれた音楽作品も少なくありません。

葵上と六条御息所

「音楽でつづる文学」の新シリーズ『源氏物語』の第一回のテーマは、「葵上と六条御息所」です。『源氏物語』の第九帖・葵の巻に描かれる物語をとりあげます。

葵上は光源氏の正妻であり、六条御息所は光源氏を深く愛した女性の一人です。十六歳で東宮妃となり、姫君を生んだのちに、二十歳で未亡人となってしまう六条御息所は、二十四歳のときに、七歳年下の光源氏から熱心に求愛され、徐々に心を開いていきました。しかし、慎重で深く思い詰める六条御息所の性格に気疲れするようになった光源氏は、夕顔をはじめ、新たな女性たちに心が移っていきます。その苦しさから、生霊になり、光源氏が愛する女性たちに取り憑いてしまうのが六条御息所です。

『源氏物語』葵の巻には、賀茂の新斎院の御禊行列における葵上と六条御息所の車争いをきっかけに、心が乱れていく六条御息所の姿が描かれています。教養があり、高貴で美しく、繊細で内向的な女性でありながら、その心とは裏腹に、生霊となってしまう六条御息所には、妖艶で凄惨なイメージがつきまといます。

そのイメージを強く打ち出す作品の一つが能《葵上》です。能では、懐妊し病床にある葵上を、舞台前方の一枚の小袖で象徴的に表現します。その葵上に襲いかかる六条御息所。破れ車に乗せて、幽界へと連れ去ろうとします。

今回の公演では、『源氏物語』から生まれた能《葵上》に関連する作品をご紹介します。取り上げるジャンルは、小唄、山田流箏曲、地歌です。地歌とともにご案内する京舞の魅力も見逃せません。各ジャンルの第一人者の皆さまによる素晴らしい実演を、どうぞ、お楽しみに。

文／野川美穂子

源氏物語絵色紙帖　葵
土佐光吉筆（京都国立博物館所蔵）

音楽でつづる文学5
源氏物語
―葵上と六条御息所―

小唄《夕顔》《三つの車》
《六條御息所》
山田流箏曲「葵の上」
京舞「葵上」
解説:野川美穂子

12/17（土）14:00

※公演開催についての最新情報は
紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。